

時實早苗先生を送る

梶 田 幸 栄

時實早苗先生が2013年3月をもって千葉大学文学部を定年退職される。

先生が国際言語文化学科文芸様態論講座にアメリカ文学の教授として赴任されたのは1998年10月のことであった。この前後約10年間は、英語系分野の組織も教員構成も大きく変化した時期であった。組織のほうは、1994年の文学部改組の結果、それ以前の英語英米文学としてのまとまりがなくなり、英語系教員は文芸様態論講座と言語文化構造論講座に、学生のほうはイギリス文化論・アメリカ文化論・言語文化構造論の3コース（現在は、その後の改変により、英語圏文化論・言語構造論の2コース）に分属することになった。そして、教員構成のほうは、2000年12月に30年もの長きにわたってイギリス文学を講じてこられた水之江有一先生が57歳という若さで急逝され、2001年と2005年には、それぞれ、イギリス文学の玉泉八州男先生とアメリカ文学の小野清之先生が定年退職されて、新しい先生方を次々とお迎えすることになった。そのような状況のなか、時實先生は着任後ほんの数年で、生来のリーダー的素質を発揮されて、英語系教員の中心として取りまとめ役を務めてくださるようになった。

ご専門はアメリカ文学、文学理論であるが、先生の興味と関心の幅は非常に広く、日常の何気ない会話の端々から学問の守備範囲の広さに感銘を受けることがしばしばある。それも先生の長く豊かな研究歴のゆえであろう。

先生は中学時代にアメリカ文学に出会われ、ヘミングウェイなどを英語で読んでいらしかったが、それ以前は、日本の古典文学、とくに『源氏物語』に心惹かれ、ひとりで現代語訳を試み、夏休み自由研究として「源氏物語研究」をまとめたりしておられた。高校時代にウィリアム・フォークナーを知り、大学はフォークナーを研究するために東京教育大学文学部アメリカ文学専攻に進まれた。東京教育大学大学院では、フォークナー研究とともに、そ

の当時話題になり始めていたフランスのヌーヴォー・ロマン、構造主義、さかのぼってロシア構造主義などを精力的に学ばれた。先生はこのころから文学の内容より形式に興味を持ち始められたとのことである。

大学院以降は、種々の読書会、研究会に参加され、様々な分野で多くの師、先輩、友人と共に研究する機会に恵まれた。同じように理論に関心を持っていた方々の読書会に参加して多くを学ばれ、アメリカン・スタディーズの研究会で主として日米関係を勉強された。一方、エリザベス朝研究会にも長い間参加され、シェークスピアや英文学のみならず、シェークスピア批評を通じた批評史を学ばれた。名古屋大学在任中には、さらに日本文学（特に古典文学）研究者の研究会にも参加された。移動が多かったせいか、学会活動にはあまり深く加わってこられなかったため、これらの勉強会が自己形成の原資となったとお考えのようである。

「文学理論」という研究分野のことを意識し始めていたころ、デコンストラクションのことを知られた。アメリカ留学を目指したときにはポール・ド・マンに学ぶという目標を持たれたが、1981年にフルブライト研究員としてイエール大学に行ってみると、ド・マンはサバティカルであったので、結局もうひとつ奨学金を得て2年滞在されることになった。イエールではド・マンの授業を受けるまでに、アメリカン・スタディーズの授業と共に、イエール・マフィアとよばれた他のデコンストラクション主義者、すなわちジェフリー・ハートマン、ハロルド・ブルーム、J. ヒリス・ミラーすべての授業を受け、さらにジャック・デリダの特別授業まで聴かれた。アメリカ東部の文学の雰囲気を感じ、哲学からヨーロッパ文学まで広く学び、「文学理論」あるいは「文学」という分野を追求し得ると感じられたとのことである。

先生は、文学理論的には、「書くこと」をデコンストラクションとは異なるご自分なりの理論の柱としてフォークナー論を構成し、米国留学からの帰国後に英語で最初の著書を書き下ろされ、1986年に *Faulkner and/or Writing: On Absalom, Absalom!* を出版された。

フォークナーに対する興味はその後も持ち続けていらっしゃるが、次の研究対象としてはヘンリー・ジェイムズを選ばれた。「書くこと」に付随する

主体、権力、責任などの問題を考えるための「作家」という概念に、作家中の作家というべきジェイムズがふさわしいと考えられたからである。後期の長編を論じたものを書き下ろして博士論文 *The Politics of Authorship* を筑波大学に提出され、1994年に博士号（文学）を授与された。この論文は2冊目の著書として1996年に出版された。

その後は、フォークナーやジェイムズで部分的に触れられた「手紙」に興味を持たれた。手紙の研究というと、それまでは作家の手紙や書簡体小説にほとんど限られていたが、手紙と文学の理論的關係により関心を持たれ、手紙は文学の本質であると同時に象徴でもあると考えられた。新しい小説、新しい批評も含めてアメリカ小説に様々な様態で扱われている手紙を論じた論文を2008年に『手紙のアメリカ』にまとめられた。手紙と関係のある作品でアメリカ文学史をたどるという趣向であった。先生は留学以降英語で発表することを基本としてこられたが、この書は日本語で発表された。出版に当たって、故福原麟太郎東京教育大学名誉教授の業績を記念して設立された福原記念英米文学研究助成基金より助成を受けられた。

先生のご活躍は国内に留まっておらず、1988年にはフルブライト交換教授として米国ド・ポー大学及びワバシュ大学で日本文学・文化をそれぞれ半年ずつ講義された。また、アメリカをはじめ、オランダ、ポーランド、フィンランドで積極的に研究発表をなさる一方で、千葉大学に海外の研究者を招いて国際シンポジウムを2回開催し、組織、運営、広報、司会、発表のすべてを行われた。2004年にはWomanly Expertiseという題で、明治期の女性の職業的自立を文学と歴史の2つの側面から議論し、2010年にはMigrating Wordsと題して、アメリカ文学における言語的移動について議論された。

教育面では、大学院修了後、名古屋大学教養部・総合言語センター（1976年10月～1987年9月）、東京農工大学農学部・工学部（1987年10月～1998年9月）などで教鞭をとられた後、千葉大学で初めて本格的にアメリカ文学を教える機会を得られた。文学部ではアメリカ文学史、アメリカ小説論、アメリカ文学演習などを、人文科学研究科ではアメリカ文学論、文化学理論を担当され、専門の演習授業を英語で行うなど、学生の教育に強い熱意を

もってあたられた。2011年度には先生ご指導の学生の卒業論文が国際言語文化学科の優秀卒論として選ばれ、『文学部の新しい波』に掲載された。また、ご自身の数度にわたるアメリカでの研究のご経験から、学生に積極的に留学を勧められたようで、先生の教え子の中には、在学中に留学した人や、卒業後海外に雄飛した人が多くいる。

大学の管理運営面でも先生は多くの要職を歴任された。2004年度には教務委員長を、2002年度と2010年度には国際言語文化学科長を務められ、仕事を手際よくテキパキと片付けていらした。また、各種の英語入試問題作成の際には度々重要な役目を担われた。先生は大学のあるべき姿、学問に携わるもののあるべき姿について確固とした理念と信念をお持ちで、そのことは教授会や学科会議での鋭い質問や的を射たご発言から窺い知ることができた。他方で、同僚や若手の先生方の個々の状況にこまやかなお心遣いを示されて、スムーズに研究・教育に取り組めるよう、さまざまなご提案をなされ、その実現に腐心された。2008年度から4年間は千葉大学英文学会の第6代会長として会の運営にご尽力くださった。

このように文学部における研究・教育に多大な貢献をされた時實先生が大学を去られることは大変に残念なことである。ことに、全学の定員削減の方針のため、先生のご退任に伴って、文学部にアメリカ文学の専門家が一人もいないという事態になることは大変な痛手である。残された者の間で、この事態をどう乗り切るか、真剣に考えて対処していかなければならない。

私は東京教育大学文学部の学生時代にすでに、1年先輩の時實先生を存じ上げていた。先生はアメリカ文学、私は英語英米文学と、専攻が違っていたが、共通の図書室があり、そこで冬の寒い日に身動きひとつせず本を読んでいらした先生のお姿をよく覚えている。その当時は、その後30年近くたってから、同僚として同じ大学に奉職することになろうとは思ってもいなかった。この14年余り、いろいろな面で、すぐ前を歩むロールモデルとして、また、ここぞという時に頼りになる先輩として間近にいてくださったことは、自分に恵まれた大きな幸運の一つであったと思う。

先生は千葉大学ご退職後新しい大学で研究・教育に当たられると伺っている。先生の今後ますますのご健康とご活躍を心よりお祈りいたします。

時實早苗先生略歴

学歴

- 1966年 3 月 東京都立立川高等学校卒業
- 1966年 4 月 東京教育大学文学部アメリカ文学専攻入学
- 1970年 5 月 東京教育大学文学部アメリカ文学専攻卒業
- 1971年 4 月 東京教育大学大学院文学研究科英文学専攻（修士課程）入学
- 1973年 3 月 東京教育大学大学院文学研究科英文学専攻（修士課程）修了
- 1994年 3 月 筑波大学より学位取得（文学博士）

職歴

- 1970年 6 月 東京教育大学文学部教務補佐員
- 1973年 4 月 立正女子大学教育学部助手
- 1974年 4 月 東京成徳女子短期大学英文科講師
- 1976年10月 名古屋大学講師教養部
- 1979年 4 月 名古屋大学講師総合言語センターに配置換え
- 1981年 2 月 名古屋大学助教授総合言語センター
- 1987年10月 東京農工大学助教授農学部
- 1993年 5 月 東京農工大学教授農学部
- 1995年 4 月 東京農工大学教授工学部に配置換え
- 1998年10月 千葉大学教授文学部
- 2005年 4 月 千葉大学人文社会科学部教授に配置換え
- 2008年 4 月 千葉大学教授文学部に配置換え
- 2013年 3 月 千葉大学文学部定年退職

- 1981年 9 月 フルブライト研究員として米国イエール大学に留学（1983年 8 月まで）
- 1988年 8 月 フルブライト交換教授として米国ド・ポー大学及びワバッシュ大学で講義（1989年 4 月まで）
- 2009年 4 月 客員研究員として米国イエール大学で研究（2009年 9 月まで）

時實早苗先生研究業績

学位論文

The Politics of Authorship (1995年 3 月)

著書

- 1 *Faulkner and/or Writing On Absalom, Absalom!*
リーベル出版 152pp. (1986年 7 月)
- 2 『文化のヘテロロジー』
赤祖父哲二監修、荒木、船倉、時実編 リーベル出版 249pp.
(1995年11月) (時実「イメジとジェンダー」 pp. 157-173)
- 3 *The Politics of Authorship*
リーベル出版 235pp. (1996年 1 月)
- 4 『手紙のアメリカ』
南雲堂 284pp. (2008年 2 月)

論文

- 1 「語られるもの—『八月の光』考」
『立正女子大学紀要』第 7 集 pp. 33-38. (1973年12月)
- 2 「ことばと行為—『死の床に横たわりて』」
『アメリカ文学』No. 13. pp. 55-63. (1974年 1 月)
- 3 「*The Unvanquished* の語りについて」
Otsuka Review No. 11. pp. 49-53. (1974年 7 月)
- 4 「『響きと怒り』の付録」
立正女子大学『英語英文学』No. 2. pp. 21-26. (1974年 7 月)
- 5 「小説の形態—フォークナー：『野生の棕櫚』」
『東京成徳短期大学紀要』9 号 pp. 1-10. (1976年 4 月)
- 6 「小説の形態」
『外国文学』朝日出版社 4 号 pp. 133-142. (1976年 6 月)
- 7 「尼僧への鎮魂歌」
『名古屋大学教養部・名古屋大学語学センター紀要 外国語・外国文学』
第22輯 pp. 41-53. (1978年 3 月)

- 8 「『熊』の第四章における劇的なもの」
Otsuka Review No. 14. pp. 54-62. (1978年 8 月)
- 9 「憑かれた声—小説論としての*Absalom, Absalom!*」
『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』第Ⅰ巻 pp. 179-192.
(1980年 3 月)
- 10 「書くということ」
Otsuka Review No. 16. pp. 30-34. (1980年 8 月)
- 11 「『改訂』と小説の成立—*Absalom, Absalom!*と“Wash”の場合」
『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』第Ⅱ巻 pp. 87-95.
(1981年 3 月)
- 12 *Adventures of Huckleberry Finn* and the Problem of “I”
『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』第Ⅴ巻 (2) pp. 63-74.
(1984年 3 月)
- 13 *Aspern's Precious Papers*
『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』第Ⅷ巻 (2)
pp. 127-138. (1987年 3 月)
- 14 「Writing—文学・手紙・理論」
『英語青年』第133巻 第6号 pp. 262-266. (1987年 9 月)
- 15 「始まりと終わりの眺望」
『現代の批評理論』(岡本靖正他編)第3巻 研究社 242pp. pp. 77-99.
(1988年 9 月)
- 16 *Maisie Knew*
『東京農工大学一般教養部紀要』第26巻 pp. 199-212. (1989年 3 月)
- 17 *The Cage of Language*
東京農工大学『人間と社会』第1号 pp. 95-115. (1990年 3 月)
- 18 「フェミニズムと文学理論」
Otsuka Review No. 26. pp. 122-133. (1990年 7 月)
- 19 *Anecdote of the Vase: The Introduction to The Sound and the Fury,*
Faulkner Studies Vol. I, No. 2. pp. 53-70. (1992年 9 月)

- 20 「キャディの手紙」
『アメリカ文学評論』第16号 pp. 1-9. (1998年 3月)
- 21 A Letter is Not Dead: “Bartleby” and a Theory of the Letter
千葉大学『人文研究』第29号 pp. 291-326. (2000年 3月)
- 22 Its Rightful Owner: Ownership and Sending in “The Purloined Letter”
千葉大学『人文研究』第31号 pp. 305-339. (2002年 3月)
- 23 The Letter Killeth: Literality and *The Scarlet Letter*
千葉大学『人文研究』第33号 pp. 297-329. (2004年 3月)
- 24 「腐敗の意味」
『腐敗と再生』(小菅隼人編) 慶應義塾大学出版会 408+xiv pp.
pp. 227-249. (2004年11月)
- 25 「地図的想像力」
フォークナー協会『フォークナー』第9号 pp. 60-68. (2007年 4月)
- 26 Cartographical Imagination: Faulkner’s Map of Yoknapatawpha,
The Faulkner Journal of Japan, No. 9. (2007年10月)
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/wfsj/journal/no9/2007Tokizane.html>
- 27 Letters, Diaspora, and Home in *The Color Purple*,
*Seeking the Self-Encountering the Other: Diasporic Narrative and
the Ethics of Representation*. Cambridge Scholars Publishing.
364+xxii pp. pp. 276-290. (2008年)
- 28 「エドウィージ・ダンティカの『息、眼、記憶』と「声」の手紙」
『異言語と出会う、異文化と出会う』成蹊大学文学部学会編 風間書房
pp 289. pp. 259-277. (2011年 3月)
- 29 The Letter and Crossing: Caryl Phillips’s *Crossing the River*
千葉大学『人文研究』第40号 pp. 37-72. (2011年 3月)
- 30 *The Mixquiahuala Letters* and the Meaning of Epistolarity
千葉大学『人文研究』第41号 pp. 1-34. (2012年 3月)

翻訳

- 1 『ポール・ド・マン』クリストファー・ノリス著 法政大学出版局

351pp. (2004年 4 月)

- 2 『キーパーソンで読むポストモダニズム』 ハンス・ベルテンス他編
(共訳) 新曜社 (2005年 6 月)
- 3 『バイオフィーリアをめぐる』 ケラート、ウィルソン編
(共訳) 法政大学出版局 (2009年 9 月)
- 4 『パーディタ』 パウラ・バーン著 (共訳) 作品社 (2012年 3 月)

口頭発表

- 1 「「熊」の第四章における劇的なもの」
第16回日本アメリカ文学会全国大会 (1977年10月)
- 2 「Pylon—見ることと書くこと」
第57回日本英文学会全国大会 (1985年 5 月)
- 3 Enchi Fumiko's *Masks* and Illegitimacy
Oral presentation to Center of Japanese Studies,
University of California, Berkeley (1989年 3 月)
- 4 Letters from Japan: Harriet Rice Carpenter in Japan
The First International Convention of Asia Scholars,
Noordwijkerhout (1998年 6 月)
- 5 Letters from Nemuro: Missionary Letters of Harriet Carpenter
The Twelfth Berkshire Conference on the History of Women,
University of Connecticut (2002年 6 月)
- 6 Bible Woman as Translation
International Colloquium, “Womanly Expertise: Women’s Skills and
Modernization of Japan,” Chiba University (2004年 6 月)
- 7 The Logic of Missionary Letters
Diasporic Narrative and the Ethics of Representation,
University of Turku, Finland (2005年10月)
- 8 The Logic of Missionary Letters
New Development in American Literature,
Lodz University, Poland (2006年 2 月)

- 9 The Letter and Crossing
International Symposium, Migrating Words,
Chiba University (2010年 6 月)
- 10 Epistolarity and Border Crossing in Ana Castillo's
The Mixquiahuala Letters
Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Honolulu,
USA (2011年 1 月)
- 11 Nuclear Kabuki
Visuality and Vision in American Literature,
Bialystok, Poland (2012年 9 月)